

経験の生成と変様

——発生的現象学的観点からの記述の試み(2)——

和田 渡

5 忘却の経験

忘れるとは一体どういう事態を指し示しているのだろうか。「忙」と同じ組み合わせからなる「忘」という漢字にも、こころが本来もっているはずの働きが失われているといったニュアンスが含まれているようである。生徒、学生の経験は、とりわけ学び、憶え、思い出すことを強制される経験であるが、成人にとつての経験においても思いだすことが重要な位置をしめていることは明らかであろう。またわれわれの知覚経験は、年齢とともに、生の深層の沈殿層が厚みをまし、それに伴い知覚とはば同時に生起するといつてよい想起の働きにも幅ができてくるがゆえに、結果として次第に豊かな内容をもつにいたる過程でもある。経験がそういうものであるとすれば、「わすれる」という言葉に、良い、好ましいといったニュアンスを含まない漢字があてられたのも、けだし当然のことかもしれない。

そもそも、忘れるということについてどういう風に語ることができのだろうか。「忘れ物をした」というのは、「以前にあつて今でもないものが、どこそこにあるはずだ」ということを思いだしている事態を指している。「忘れてしまいたい」と思わずつぶやく背後には、「忘れようにも忘れられない」事態がひそんでいる。また、葬りさつてしまいたい記憶ほど、かえつて現在に浮上してきて心痛の原因となるものである。こうした事例を重ねていけば、忘れることについて語る余地はなくなってしまうようにも見える。あるいは、思いだすことについての記述に心奪われて、忘却という主題が忘れられてしまいかねないようにも思える。自分の内であれ外であれ、ありありと把握しうる出来事の反省と記述に依拠するフツサールの現象学には、その傾向が顕著に認められる。言うまでもなく、フツサールの現象学の立場では思いだせないもの、意識に現前しない事柄について記述することは難しいからだ。

とはいえ、意識に現れる現象を媒介にして忘却について語れないわけではない。「忘れる」とは「思いだせない」ということである。

小学生時代の世界へと遡行してみよう。ただちに思い浮かぶ同級生のいくつかの顔はあるものの、当時日常的に接していたはずの顔はもう蘇ってはこない。幾度となく口にしていたはずの固有名詞も思いでの向こう側に消えている。毎目目にしていたはずの校門の色や形、教室の壁や窓枠の色、椅子の形などと思いだすことができない。ただし、思いだせないのは、遠い昔のことだけではない。幾度となくその前を通り、見ていたはずの建物がある日取り壊されていて、それが何であつたか思いだせないことはよくあるし、昨日目にしていた数々のものでも、蘇ってはこないことは多い。いったい、「思いだせる」と「思いだせない」との差を決めるのは何であろうか。対象からの印象の強度は私の反応の強度、私の注意力、観察力が一定程度反映するのは確かであろう。何気なく見過ごしているものは思ひだされることが少ないであろうし、心こめて見つめた異性の顔は絶えず眼前を離れない。またわれわれの経験のスタイルが利那的、享樂的か、あるいはそこにリルケ的忍耐の要素が含まれるかによっても違ってくるであろう。張りつめた生、現在に充足する生はより多くの思いをつくるであろうし、空ろな生は空ろな思いでしか持たないであろう。とはいえ、中年になって習う外国語のように、いくら注意して努力しても、忘れようにも憶えられず、したがって思ひだすことができない場合もあり、想起と忘却の差を私の生の姿勢の問題に還元してしまうわけにはいかない。忘却の経験は、私による他動詞の経験というよりも、むしろ私がその中へと巻き込まれていく受動的経験の色彩を強く持つからだ。私の生において忘却とい

う出来事が生起し、私は忘却の対象をあらかじめ志向することを許されていない。この経験においてもまた私は忘却に翻弄されるしかない存在なのだ。この点をさらに検討してみよう。

「忘れる」とは、「蘇ってはこない」ということだ。繰り返しに語るが、われわれの経験のそのつどの局面は、生の深層へと沈澱していったものが浮上する想起のプロセスと一体化して進行している。あらたな出会いと共振する形で受動的に浮上してくるこのプロセスがもしなければ、われわれの経験は「意味」を欠き、事物の地平への予測志向を失い、遂には経験の統一性を失って崩壊してしまうであろう。とはいえ、経験の展開に際して生ずる浮上のプロセスは、経験があらたに遭遇するものとの関係においておのずと組織化され、連合的に組み合わせられて可能になるがゆえに、そこには取捨選択が避けられない。結果として、生の深層に沈下したままで浮上のプロセスに組み込まれないものが残ると考えられる。その最たるものは、おそらく、客観的な把握作用の対象とならないまま自我によって生きられているヒュレー層の多くであろう。それらは、自我の生に沈澱して再び蘇ってくる度合いが少くないと言えるであろう。私の関心の圏外にあるがゆえに、見えていて見えていないもの、たとえば通りすがりに視野に入ってくる見知らぬ他人の顔、ショーウィンドーのスーツの模様、壁のしみなども、もしそれらを二度と目にする必要がなければ、私の中に沈みこんだまま、たぶん蘇ってくることはないであろう。蘇ってはこないものの多くは、私に忘れたということさえ意識させず、その意味では忘却の忘却、究極の忘却といってよ

いかもしれない。

6 水平的経験と垂直的经验

地上におけるわれわれの経験の多くは、座るにせよ立つにせよ、目の前にあるものと係わる関係であり、その関係をめざして前方へと動くプロセスから成る。そのプロセスにおいては、目がものを言うのであり、目は大抵の場合に水平方向に視線を走らせて、前方における関心や目的に適った事物を捉える。後期のフッサールは、経験のこうした側面をヘルムホルツの周知の比喩にならって「『開けた』面の生」と呼んだ。²² それは、「内的時間意識の現象学」のなかの表現で言えば、「横の志向性」にあたるものといつてよい。「面の生」と対をなすのは、「隠れた」深さの生²³ と呼ばれる「深さの次元」である。これは、「縦の志向性」に該当する。「時間図表」の説明に際して「横」と名づけられた志向性は、われわれの経験に当てはめてみれば、前方にあるものを知覚する場合に機能する志向性に他ならない。知覚的志向性は、今からあらたな今へと常に現在を生きる経験において機能している。現在の経験は点ではなく、面である。経験が面をなすというのは、今において機能する志向性が根源的な印象を源泉とする現在に限定されず、近接未来と近接過去にもその働きを及ぼしているということである。近くの教会から流れてくるカリヨンの鐘の音に耳傾けるとしよう。その時、私の側には次に聞こえてくるであろう音が既に予測されており、私の

意識は今において機能しつつも、その志向性を未来の方へと伸ばしているのである。他方で、私が耳にしたカリヨンの鐘の音は私の意識から即座に消失するのではなく、しばらく私の今の意識の内に「たった今過ぎ去った音」として保持されている。こうして、私の現在が今を起点としつつも未来と過去方向へと伸び広がる意識の志向的幅をもつ経験の流れであることによって、鐘の音が美しい音楽として耳に響いてくるのである。このように、現在の移行経験は、予持、印象、知覚、保持が相互関連し、一体化した連続的生成の流れである。

こうした生成が面における出来事であるが、言うまでもなく、面は面として自足することはできない。たとえば、鐘の音を予測する場合、それが今耳にしている音と直接に結びつくことは疑いえないにしても、その予測に際して、過去に聴いたカリヨンの響きが間接的に重なり合うことはないであろうか。あるいは、遠い過去でなく、「たった今」よりももう少し前に聴いた音の響きが予測の仕方に影響することはないのであるか。あるいはまた、新しい今への移行にともしない過去化する今が過去把持的変様の経過をたどって沈下していくという、まさにその過去への流れのプロセスそのものが、予測に関与することはないのであろうか。いずれも可と言ふべきであらう。意識の流れの根源的な次元では、未来、現在、過去が相互に浸透し、比類ない一体性をなして自己生成しているからである。したがって、ある予測にそれ以前の意識流の前過去が反映するといふだけでは十分ではなく、ある予測が知覚作用の仕方のみならず、

知覚の過去把持的変様の過程にも遡及的に影響すると言わねばならない。後年のフッサールによる、「面は、たとえ気づかれないにせよ、限りなく豊かな深さの次元の面に他ならない」⁽⁴⁾ という表現は、まさに発生的現象学の成果を踏まえたものであると言えよう。

フッサールの指摘によれば、外に向かって知覚的に開かれた「面の生」と、内に向かって隠された「深さの生」との拮抗作用には法外なものがある。⁽⁵⁾ これは、次のような意味で理解できるだろう。すなわち、われわれが知覚的志向性を働かせて水平的に移動する際には、同時に生の深層へと向かう垂直的な方向においても非知覚的な、いわば潜在的な志向性が、絶えず知覚的志向性の働きを感じしながら、またそれに促しを与えながら、間断なく機能しているということである。初期時間論の表現を借りれば、「唯一の意識流の内に、あたかも同じ一つの事象の両面のように、分ち難く統一され、互いに他を要求しあう二つの志向性（横と縦の志向性）が相互にからみあっているのである」⁽⁶⁾。おそらくメルローポンティがキアスムという言葉で言い表そうとしていたのも、「からみあい」の事態である。この事態は、意識というそれ自体は直接目にするものできないものが、目に見えるものや感じられるもの、考えられるものなどと関係する際に生起する出来事を指している。この関係は、からみあうという言い方が示すように、関係する両項が相互に働きかけて相互の中へ中へと入り込み、その働きかけを通じてお互いが一体化する運動を繰り返すような関係である。この関係は、一つの音の響きが宇宙に響き、宇宙に響きかけられて、次第に音の響き

を変えていくように、あるいは、一つの水滴を受けて直ちに変身した池が身を新しくして、次の水滴との出会いを待つように、相手から何かを受容することが同時に相手に何かをもたらしするような相互触発的な性格をもつ。われわれはここで、冒頭に述べた、Ineinanderという言葉を想起してもよいだろう。意識の生成のプロセスは、空間的距離を暗示するAuseinanderの関係とは異なり、そのつどの意識と意識以外のものとの関係に、いわば意識の全歴史が参与しているとみなせるのである。こうした観点にたてば、水平と垂直、面の生と深さの生を不可分一体のものともみなしても許されるであろう。

7 根源的な印象の経験

— 根源的感覚の生起 —

いったい、現象学において根源的な印象が問題になるのは何故であろうか。その理由の一つは、現象学が経験の生成の過程を主題化する以上、すでに生起した過程を反省的に記述するだけでなく、その過程がそもそもどのようなようにして始まるかも問う必要があるからである。経験の起源を問うことは、印象をその出来事の発端において問うことである。とは言え、根源的な感覚の出来事を、知覚可能な事物のように据えることはできないがゆえに、この場面では概念上の記述に終始せざるをえない。

フッサールの見解をまずみてみよう。「根源的な印象は絶対に変

様されぬものであり、その他いっさいの意識と存在にとつての源泉である。」「根源的な印象は変様しない」というフッサールの主張に従えば、1でのべた前述語の経験との違いをまず明確にしなければならぬであろう。それというのも、前述語の経験は、自我と対象との間で、自我の対象化的作用以前の次元で生起する意識変様を前提とするのに対して、根源的な印象はその変様の源泉とはなっても、自らが変様して前述語の経験のなかに融け込むことはないと考えられているからである。意識変様は、意識の流れの先端で生ずる根源的な印象に常に遅れて生起するのであり、両者の間には架橋したい隔たりがあると云わなければならない。こうした考え方には、われわれの思索を困難にするものがある。それというのも、変様しない印象の意識というものは、あらゆる意識が相互に浸透し合うものであるという発生的現象学の根本的なテーゼと相容れないからである。いったい、変様しない根源的な印象という意識と、変様する意識との関係をどのように考えるべきであろうか。両者は意識の流れる過程においてどのように係わるのであろうか。

この関係は、フッサールが意識の流れをどうみていたかを検討することによって明らかになる。彼によれば、意識の流れは変様の連続体であり、それは根源的な印象の側にだけ限界をもつ直線的な多様体の性格をもつ。^⑧ 直線のイメージは知覚経験の流れにおいて出会われる面や奥行的なひろがりや点を凝縮させかねない危険性をはらんでいるが、他方で、そのイメージは意識の流れの純粹な骨組みを浮き彫りにすることを可能にもする。意識が一本の線のように

前方に伸びる。意識の痕跡としての過去は現在の意識と一体となつて、未来に伸びていく。意識の流れは変様の連続による多様な運動として、どこまでも前方に向かうことを止めないのである。このように見た場合、前方に伸びる意識の流れの源泉を考えないわけにはいかない。そこを起点として意識の変様が生起する、まさにその根源的な場所における出来事、それがフッサールの言う根源的な印象である。いうまでもなく、その根源的な場所は固定した位置を占めず、常に意識の運動の先端で意識を待ち受けるものである。しかし、根源的な印象は一度たりとも意識の流れの変様する経過のなかに吸収されることはない。根源的な印象は、意識の流れの源泉で意識に対して意識変様の契機を与えつつ、不断に意識の流れの手にあり続けるもののなのである。それゆえに、根源的な印象と意識変様との間には一方方向の関係しかないと考えるべきであろう。現在の意識と深層意識の間で相互浸透的に生起する受動的総合の働きが、自我の対象構成に先行してヒュレー的与件をあらかじめ意味的に構成する点については既に述べた。しかし、意識と意識の相互浸透的な結びつきは、意識変様の過程内においてであり、根源的な印象にまでは及ばないのである。それゆえ、フッサールは根源的な印象が変様の産出の絶対的出发点であり、根源的な印象それ自身は産出されないと述べる。^⑨ 根源的な印象は「自発的発生 (Genese spontanee)」^⑩ によって生じるものとみなされ、「根源的な産出 (Ureugung)」^⑪ と呼ばれている。そして、変様の産出は意識の自発性によって可能になるのに対して、根源的な産出は意識が「根源的に発生したもの、

新しいもの」⁽¹²⁾ を感受する出来事とみなされている。つまり、意識は自らが会おうものを自発的に産出することはできず、そのつど自分と無関係に出現してくる新しいものを感受する他はないのである。ここで語られているのは、自我の能動性と対比的に受動的と呼ばれる、前述語的经验における総合の働きにおける受動性とは異なり、意識流の源泉における意識の根本的受動性である。

意識の働きには比類ない能動的な特徴が多く認められるにしても、その運動の源泉においては根本的に受動的な出来事が生起しているということ、意識の自発性に支えられた変様の産出と、意識の受動的な出来事としての根源的な産出との間には質的な差異があるということ、根源的な印象は「根源的な創造」⁽¹³⁾ として始まるということ、始まりがある以上、意識流の生成の途上には、「新しいもの」が出現する瞬間があるということ、根源的な印象の検討によって、こうしたことが確認できる。

8 時間意識の経験

フッサールの現象学は、時間論ではなく、時間意識というひとつの意識を主題化する思索の試みである。事物ではなく、事物意識が問われると同様に、「時間とはなにか」という問いの設定ではなく、時間意識の生成の仕方が問われるのである。自分の外に時間を問うのではなく、自分において、時間意識がどのようにして生起し、経過・変様し、後退していくかが記述されねばならない。時間意識と

は、時間についての意識ではなく、それ自身が時間的に変化する性格をもった意識、時間の経過がすなわち生成・変様の経過であるような意識を意味している。時間意識とは、根源的な印象を源泉として、自我の対象構成や、意識流の自己構成ともいふべき受動的総合の働きが相互浸透しつつ、ひとつの統一体として生成するプロセスにはかならない。それゆえ、時間意識が時間的に変化する意識であるといっても、その変化が常識的な意味で考えられる、静止と対をなした事物的な変化と異なることは言うまでもない。後者は前者を相関項とすることによってのみ変化として意識されるにすぎないといってもよいであろう。

フッサールによれば、客観的な意味での時間的存在が現出している体験Ⅱ時間統握や、その統握そのものの土台をなす体験の諸契機またはスペチエス的な時間的統握内容が現象学的与件である。⁽¹⁴⁾ ここで意味される現象学的与件とは、フッサールの別の表現を借りるならば、「現出する時間そのもの、現出する持続そのもの」⁽¹⁵⁾ であり、「経験世界の時間ではなく、意識経過の内在的時間」⁽¹⁶⁾ である。ただし、あらかじめ十分に注意しなければならないのは、時間概念の両義性である。すなわち、現象学的与件としての内在的時間とは、意識の流動的経過、過程と同義であり、時間という概念は時間という特定の存在領域を意味するのではなく、経過という意味で用いられているにすぎないのである。前内在的時間、内在的時間、前現象学的時間、現象学的時間といった概念は、すべて時間を経過Ⅱ流動と置き換えて考えてさしつかえない。これに対して、客観的時間に

よって意味されるのは、意識のように流れる経過Ⅱ時間ではなく、事物の持続する時間である。事物の持続とは、事物が静止してそこに在り続けることであるから、客観的時間とは流れない時間、すなわち静止を意味すると考えてよい。もしも、客観的時間が流れるものだとすれば、その流れの経過の仕方、それが意識に与えられる仕方が問われなければならないであろうし、客観的時間の流れが意識のそれとどのように関係するかも問題になる。しかし、これはフッサールの問いではない。時間意識の経験の現象学で重要となるのは、「流動する意識Ⅱ流れる時間」と「持続する、すなわち静止する事物Ⅱ流れない時間」とが交錯する場面の記述なのである。このことを、次の表現が端的に語っていると言えよう。「時間は不動であり、しかも時間は流れている。時間の流れのなかで、過去への絶えざる沈下のなかで、『流れることのない、絶対に固定した、同一的な、客観的時間が構成されるのである。』」⁽⁷⁾ 二つの時間を、大地（Ⅱ静止する時間）とその上を走る電車（Ⅱ流れる時間）との関係に見立てることもできよう。人間の経験にあてはめて言えば、それ自身が動くことのない大地Ⅱ世界にあつて、われわれが動くのである。動くことをやめないわれわれはまさに、生成変化し、流動する存在なのであり、それぞれがひとつの時間であると言ってもよいであろう。その固有な、流れる時間において、流れない時間が出会われ、生きられるのであり、それがわれわれの経験である。しかも、この経験は、そこにおいて比類ない出来事が不断に生起している意識の経験である。この経験を生成の観点から再度検討してみよう。ただし、

以下では、発生的現象学的観点からの生の深層への反省よりも、むしろ反省の比重を現在の出來事の方に置いて記述してみたい。

現在における出来事は、フッサールによれば、「連合的総合の前提としての、根源的な時間意識の総合」⁽⁸⁾の問題である。反省的記述がそもそも可能となるのは、それ以前に時間意識が流れているからである。これが「永遠のヘラクレイトスの流れ」と見なされている点についてはすでに触れた。いったい、根源的な時間意識の総合とはいかなる事態なのであろうか。ここで問題となる総合は、自我の作用と自我の生の関連において受動的総合が生起する以前の、根源的な時間意識による総合である。この総合は、意識の「連続的な流れ (Fortströmen)」⁽⁹⁾の先端において意識と意識が結びつく事態であり、そこでは、7で述べた原印象同士が瞬時に結びつくと考えてよいだろう。この事態は「原印象的な共存」⁽¹⁰⁾と呼ばれるものである。原印象自体が意識の自発的な産出によるものでないことは既述したが、意識の流れが先へと進むにつれて、原印象は次の原印象にとって代わられる定めにある。意識は、あらかじめ自分で原印象の内容を決定することはできないが、自らが流れることを通じて原印象に出会うのである。こうした流れの局面を考慮して、フッサールは根源的な意識の総合の内に、原印象の共存と共に継続という事態を認めている。意識流の先端では、「多様な原印象」⁽¹¹⁾が同時に感受されるや否や、継続的に流れ去るという出来事が不断に生起しているのである。「原現象」と名づけられたこの出来事において、まずは意識同士の間に固有な総合が生じているのである。⁽¹²⁾ この総

合の出来事との関連で言えば、自我の作用は常にそれに遅れて始まらざるをえない。とはいえ、通常の経験において、この種の遅れはほとんど意識されないままである。それゆえに主題化しにくい問題ではあるが、自我の作用が不意に出現するものでない以上、その前後の関連を考えてみる必要はあるだろう。

上に述べたように、自我の作用が始まるまえに、一瞬それに先行して、意識流の源泉で多様な原印象が共存する形で受容され、受容された原印象は継続する流れのなかで変様の経過をたどる。変様をこうむる原印象は、意識の流れに融合することによって、直ちに意識の流れの全連関と相互浸透するとみなしてよいであろう。こうした意識流において生起する総合の過程に後続して、自我の作用が開始される。この総合の過程において、多様な原印象の受動的な統一化が生じ、自我に促しを与え、自我はそれに呼応する形で反応するのである。この事態をヒュレー的与件の自我触発と自我の応答とみなすことも可能である。フッサールは、周知のように、自我の働きとしての知覚が、すべて過去把持と予持の庭をそなえているとみなしているが、⁽²⁾この場合、自我の前方へ、あるいは近い未来へと志向する予持の働き方が現在の知覚と関連することはいうまでもない。しかし、他方で、その働きに影響を及ぼすのが、変様経過の過程をたどって自我に到来する原印象である。自我の予持という働きは、その作用の成立に係わる先行的な意識総合と浸透し合うなかで生起してくるのである。

次に知覚を考えてみよう。ここでは、フッサールに倣って、メロ

八

ディーの知覚を例にとってみよう。原印象の共存から継続・変様と続く流れのなかで、次から次に音が聞こえてくる。私がもしもそれらの音に注意を払わなければ、それらは若干の刺激を私に残して消えていくだけかもしれない。しかし、聴く耳をもつ私には、音の連続が音の楽しみに変わる。私の過去の記憶が次の音への期待を膨らませ、今聴く音は私の心に鮮烈に響き、聴き終えた音は、しばらく私の過ぎ去ったばかりの現在と近い過去にとどまり、今耳にしている音の登場と後退に歩調を合わせるようにして、ゆっくりと遠い過去へと沈下してゆく。私が勝手に作りだしたのではない音が、私に与えられる。音が与えられるのはそのつどの今であるが、意識の流れにおける今はただちに過去化するため、意識に与えられた音は意識の流れにのって過去へと後退してゆく。私はこのプロセスを止めることはできない。知覚は私の働きによるとしても、一度なされた知覚作用は過去へと経過・変様するのであり、これは意識流に固有の法則といつてよい。過ぎ去っていく音に注意の視線を向け続けることによって、それが過去へ後退するのを引き留めようとしても、それは流れの法則に従って速さかかっていくのである。

ここで、われわれは、二つの流れを区別することができる。ひとつは、意識流が未来へと向かう流れであり、それは多様な原印象の感受を起点とする流れである。原印象は意識流の自発性の領分に属さないという意味で、内在的意識経過に位置づけられる。とは言え、そのつどの今において原印象に遭遇する意識はそれ以前から流れ続けているのであり、原印象の出現という事態をそれだけで他と孤

立させて捉えることはできない。それゆえ、フッサールは次のように述べる。「顕在的な原感覚の《共時 Zusammen》ないし《同時 Zugleich》はすべてを包含し、たつたいま先行したばかりのあらゆる原感覚の、その《以前》ないし《先行した状態》や、原諸感覚の各共時のそのような『以前』への恒常的変転も、すべてを包含するのである。」⁽⁴⁾つまり、原諸感覚が同時に与えられるまさにその時点に、それ以前に与えられた原感覚の変様を含む、意識変様の全系列が連関しているのである。この事態は、前者において同時性が、後者において継続性が構成される流れの原場面と考えられるが、両者は不可分一体をなしている以上、区別は言語上のものにすぎない。意識流は、フッサールの言葉を借りれば、「全一性 (Allinheit)」⁽⁵⁾なのである。すなわち、意識はその全連関が一であるような、あるいは全体がひとつのまとまりをもった統一な流れなのである。この自己統一的な流れの自己構成を受けて、知覚が可能になる。知覚は、その作用が生起する以前と以後の意識の受動的総合の働きに促されつつ、多様な原印象の変様を受けて、特定の対象に注意を向け、それに意味を与えるような自我の働きである。知覚は意識の流れの今における働きである。「知覚は今から今へ移行し、予見しつつ今へ向かつていくのであり、それが知覚の本質である。覚めた意識、覚めた生とは何かに向かつて生きること、新しい今へ向かう今の生である。」⁽⁶⁾フッサールはこうした、前方を目指す志向的な知覚的生の流れによって、内在的時間すなわち、持続的存在の持続や変化を包含する真の時間である客観的時間が構成されると考えている。⁽⁷⁾

この世界に静止し続けることを通じて己の客観的な時間位置を占める事物と意識流が遭遇する源泉、それが客観的時間構成の起源とみなされているのである。意識の流れは事物の感覚および知覚と不可分であるから、この作用系列において、客観的時間が構成されるという見解である。とはいえ、これは客観的時間が意識によって意識の外に想定されることを意味しない。絶えず新しい今へと向かう知覚は、そのつどの事物知覚を「今」として意識し、この今意識はただ一度限りのものである。もう一度同じ事物を知覚したとし、その際に「さきほど知覚したものだ」という意識が働くとしても、その知覚作用は新たな今における出来事である。このようにして、意識の流れと、その流れに不可避的に伴う事物知覚の出来事ほどの局面もすべて一度限りで、そこには厳密な秩序がある。今は過去に先行する今であり、未来は今に先行する未来であって、この秩序は一定なのであり、この秩序の意識が、客観的時間構成を可能にする。自らが流動する知覚意識は、その流れのうちで、流れることのない、つまり静止した事物との出会いをそのつどの今として意識しつつ、おのれの時間位置を客観的に確定するのである。したがって、客観的時間は、主観的な時間意識によって構成されると言わねばならない。

もうひとつの流れは、知覚的生が新たな今へと向かうにつれて、それによって押し退けられた今、すなわち今という性格を失って、過去へと後退する経過現象の流れである。新たな今へと移行した知覚が、もはや今ではなくなったものをしばらく現在の意識に保持し

うるとしても、過去化した今は、知覚の移行に伴い次第に沈下変様することをやめない。この流れの系列は、知覚現在における自我の過去把持、過去把持の過去把持という、現在から後退する変様過程であり、顕在的なものが非顕在化する過程とみなしてよい。「存在の生き生きとした源泉点である今においては次々に新しい原存在が発源し、その過程に属する諸時点とそのつどの今との隔たりは、この源存在との相対関係において絶えず増大し、それによつて沈退、遠退きの現出が生ずるのである。」⁸⁰ 今が新たな今へと絶えず移行するということは、すなわち、その移行と相關的に過去へと沈下する流れが生起するということなのである。とは言え、この場合に、両者の流れが相反する方向に向かうと考えるべきではない。過去へと向かう流れは、知覚的現在が新たな今を目指して進むのと同じ方向に向かつて流れるのである。ただし、両者の間で異なるのは、現在から後退する過去把持の変様の流れが沈下し、そのつどの今に対しては垂直的な方向に流れるけれども、知覚的生の流れは水平方向に向かうということである。したがって、今から新しい今への移行は、両者の流れの幅が次第に拡大する傾向をもつと言わねばならないであろう。ところが驚くべきことに、フッサールによれば、過去に向かう流れは同時に現在に終着する流れでもある。「過去連続体は今をその終着点としており、しかも絶えず先行していたものが次第に深く過去の連続体のうちへ押しやられるにつれて、絶え間なく次々に新しい今の内に終着するのである。」⁸¹ 過去へ向かう流れが、同時に新たな現在に向かう流れでもあるということをもどるように理

解すべきであろうか。ここで、フッサールの受動的総合という考え方を重ね合わせてみればよい。すなわち、ここで示されている、言わば沈下する流れと上昇する流れは、自我の関与しえないところで生起する、自我の能動性を基準にすれば受動的な出来事であり、この出来事の特徴は、現在と過去、現在の生と生の深層とが連合の原理を介して自在に結びつき、変成する点にある。この点に注目すれば、流れの相反的方向性は決して奇異ではなく、逆に意識流の特異性を示すものと言えよう。この様に把握しなければ、次の表現も理解できないであろう。「他方の志向性(縦の志向性)においては、流れの諸位相の・・・すなわち流れゆく(今)に時点つまり顕在性の位相と、一連の前顕在的および後顕在的(すなわちいまだ顕在的でない)諸位相とを常に必然的に備える流れの諸位相の・・・疑似的な時間的配列が構成されるのである。」⁸² フッサールは、この流れを前内在的時間性、前現象的時間性と名づけているが、「前」という接頭辞が付けられているのは、言うまでもなく、この流れが内在的時間に客観的時間構成に先行する、あるいはその構成の一手前の位相に位置づけられることを示すためである。客観的時間構成が、意識流の先端で意識が多様な存在を知覚する場面として生起するとしても、その出来事は、そのつどの知覚の成立に内側から関与し、意識流の先端まで伸びる内的流れ(「現在から後退し過去化変様する流れであり、同時に新たな現在へと終着する流れ」)が絶えず先行して己を構成していなければ不可能なのである。

以上述べたように、意識流はその流れる方向に即して見れば、二

つの流れに大別することができるであろう。また原印象を源泉とする意識変様の過程が刻々と意識の流れに変様を加えている以上、その過程に即して、二つの流れをさらに細かく多岐にわたって分けることも可能であろう。しかし、それが可能であるとしても、意識を生成の観点から見ると、それは己の内に多を含んだ一つの流れとみるべきであろう。そこにおいてあらゆる種類の構成がなされる「根源的な場所」⁽³¹⁾としての時間意識の流れは、多様なものを一つの全体へと結びつける連合の原理をうちに含む、根源的な総合のプロセスであり、自己統合的な発生的生成のプロセスでもある。「われわれが反省によつて見出す唯一の流れはさらに多くの流れに分岐するのであるが、しかしこの多にはやはり統一性が備わっており、それがために一つの流れという言い方が許されもし、また要求されるのである。」⁽³²⁾

9 時間意識と時間構成

時間意識は絶えざる変化の流れであり⁽³³⁾「絶対的な生成」⁽³⁴⁾である。それは、永遠の流れとして、自我の覚めた意識が機能する以前も以降も、それ自身で自己生成する連続体である。この流れのなかで、自我の作用が働く場合には、流れることのない事物との出会いと、それが時間意識のなかで変様する過程が今、たった今、まもなく、すでに、といった時間に係わる言葉で意識化される。しかし、その作用が続けられていようと、休止していようと、あるいはそ

の対象化の働きが及ばない次元でも、時間意識はそれ自身の固有なリズムで流れ続けている。

時間意識の流れの源泉が、フッサールによれば、原感覚≡原印象である。この源泉は自我の対象化の働き以前に、常にそれに先行して生起する絶対的な始まりを意味する。「感覚は《これ》の固体性の源泉であり、したがって絶対的時間位置の源泉である。」⁽³⁵⁾時間意識の流れる場所はこの世界、あるいは宇宙において他にはないのであり、それゆえに時間意識は不断に世界内の事物との原感覚的な交わりを生きている。われわれが眠る間も、起きて活動する間も、この交わりは途切れることなく続いている。原感覚は常に「新しいもの」との出会いであり、それが生起する時点は、敢えて抽象化して言えば、「純粹な今」である。純粹な今≡原感覚的な今は理念的限界点としての今である。それは、私の今の意識にわずかに先行し、敢えてそれを対象化しようと試みた時には既に過去化して、もはや今ではなくなっているような今である。したがって、純粹な今はそれとして意識されることはないが、だからといって無ではない。たとえば、カリヨンの鐘の音が響く場面を考えてみよう。不意に鐘の音が耳に届く。それを鐘の音として知覚した時には、既にその音は過去化している。過去化する以前の状況、すなわち、鐘の音と意識されることなく、直截に音が耳に届く瞬間が、音の原感覚である。この状況を、音の意識以前に、音と私が未分化一体を成しているともみなすこともできよう。原感覚的場面は、主体も客体もなく、両者が不可分に融合して生成する原初的な生の過程なのである。こ

うした意識の流れの感覚的な源泉が、対象化される以前の絶対的な今という時間位置を占めている。「鐘の音が鳴り始めるときの客観化された時点には、それに対応する感覚の時点が対応している。つまり、その感覚は最初の位相では、「客観的な鐘の音と」同じ時間を有しているのである。すなわち、やがてその感覚が対象化されると、必ずそれはそれ自身に対応する鐘の音の時間位置と一致する時間位置を獲得するのである。」⁸⁶ 原感覚的なものが対象化され事物として意識される時点で、絶対的な今という理念上の時間位置が、知覚の今という現実的な時間位置へと変わるのである。

知覚作用は覚醒した意識が、時間意識の流れのそのつどの今において遂行する対象化の働きである。知覚は時間意識に固有なひとつの働きであり、知覚における事物把握は今から新たな今への移行のなかで行われる。「時間意識は、それゆえ客観を構成する意識である。」⁸⁶ 時間意識が流れであり、知覚も流れにおける出来事である以上、あらゆる事物知覚はそのつど今一度限りのものである。静止する事物は何度でも繰り返し知覚意識に与えられるが、その場合に繰り返しされる知覚作用はそれぞれ異なる時間位置を占めるのである、決して同一ではない。目を見開いて見る机は、一度目を閉じたあとに見る机と同じように見えるとしても、両者の知覚の間には流れが介在し、作用の時間位置が異なるのである。机は目の前に存在し続けているのであり、机の知覚は流れ続けている。今見る机は、先程見た机と同じものとして把握されようとも、作用と作用は流れによって隔てられており、しかもそのつどの作用が受動的総合の働

きを蒙りつつ生起する点を考慮すれば、ふたつの作用は異質なものと考えなければならない。知覚は流れの法則に従って生起するのである。

知覚の特徴は、既に指摘したように、「そのつど顕在的な、時間的に新しい今」⁸⁷ における出来事である。知覚はそのつどの今における対象意識であり、その意識には暗黙の内に今の意識も含まれている。それゆえに、新しい今の知覚への移行に伴い、それに先行して知覚されたものは、「たつた今」の知覚として新たな今との相関性において意識される。今との隔たりが広がるにつれて、過去へと後退した知覚は、「昨日」「三日前」「昨年」といった時間に係わる言葉で、常に今を基準にして意味づけがなされる。三日前に見たポスターを、昨日を基準にして二日前に見たとは言わない。将来についても同様で、今を基準として「三日後、一週間後」と言われる。意識の顕在的な流れの位相では知覚が中心的な位置を占め、知覚の今を基準にして、非顕在的な流れへと沈下する知覚が過去のな意味づけを受けるのである。たとえば、目の前の窓を見た後、天井のランプを見る。この場合、ランプの知覚が今を構成し、窓の知覚はもはや今ではなく、過ぎ去った今、過去化した今の知覚でしかない。常に今の出来事として生起する知覚の流れの中で、そのつどの今は絶対的な時間位置を占め続け、その時間位置は知覚される事物の時間位置と合致する。こうして、主観的な時間意識の流れのなかで、静止し続ける事物の時間が客観的な今として意識され、事物の側に客観的な時間秩序が構成されるのである。先の引用を繰り返せば、

Sep. 1996

経験の生成と変様

「時間の流れのなかで、過去への絶えざる沈下のなかで、へ流れる」とのなほ、絶対に固定した、同一的な、客観的時間へが構成されるのである。」⁸⁾

注

- (1) 本稿は「経験の生成と変様——発生的現象学的観点からの記述の試み(1)——」(『立命館文学』第五四三号〔一九九六年二月〕に掲載)の続編である。
- (2) Vgl. *Husserliana* Bd. VI, § 32.
- (3) *Ibid.*, S. 122.
- (4) *Ibid.*, S.121f.
- (5) *Ibid.*, S.122.
- (6) *Husserliana* Bd. X, S. 80.
- (7) *Ibid.*, S. 67.
- (8) Vgl. *ibid.*, S. 99.
- (9) Vgl. *ibid.*, S. 100.
- (10) *Ibid.*, S. 100.
- (11) *Ibid.*, S. 100.
- (12) *Ibid.*, S. 100.
- (13) *Ibid.*, S. 100.
- (14) Vgl. *ibid.*, S. 7.
- (15) *Ibid.*, S. 5.

- (16) *Ibid.*, S. 5.
- (17) *Ibid.*, S. 64.
- (18) *Husserliana* Bd. XI, S. 125.
- (19) *Ibid.*, S. 127.
- (20) *Ibid.*, S. 175.
- (21) *Ibid.*, S. 127.
- (22) Vgl. *ibid.*, § 29.
- (23) Vgl. *Husserliana* Bd. X, S. 105.
- (24) *Ibid.*, S. 77.
- (25) *Ibid.*, S. 77.
- (26) *Ibid.*, S. 106.
- (27) Vgl. *ibid.*, S. 81.
- (28) *Ibid.*, S. 69.
- (29) *Ibid.*, S. 69.
- (30) *Ibid.*, S. 83.
- (31) *Husserliana* Bd. XI, S. 128.
- (32) *Husserliana* Bd. X, S. 76.
- (33) Vgl. *ibid.*, S. 65.
- (34) *Ibid.*, S. 296.
- (35) *Ibid.*, S. 72.
- (36) *Ibid.*, S. 297.
- (37) *Ibid.*, S. 66.
- (38) *Ibid.*, S. 64.

(一九九六年七月一五日受理)